

病理診断科

(1) 到達目標

基礎的な病理学的知識と病理検査技術・病理解剖手技を学び、それをいかして日常の病理診断・解剖業務に携わり、病理診断の過程を理解する事を目標とする。

(2) 行動目標（代表的行動）

1) 病理診断業務に必要な知識

- ①病理学総論を理解し、説明できる。
- ②病理組織・細胞標本の作製行程を理解している。
- ③特殊・免疫染色の目的を理解している。
- ④遺伝子検査法に必要な検体の種類、性質を理解している。
- ⑤術中迅速診断の目的や凍結標本作製行程を理解している。
- ⑥病理診断学に必要な臨床情報を理解し、病理診断との関連性を説明できる。
- ⑦病理解剖の手続き、死体解剖保存法の概要を説明できる。
- ⑧病理業務に関した資料の適切な管理及び保管ができる。

2) 病理診断業務に必要な手技・技能

- ①病変の肉眼的所見の取り方、一般的な臓器切り出し法、およびがん取扱い規約に基づいた臓器の切出しができる。
- ②感染物を含む医療廃棄物に対する取扱いが適切に実施できる。
- ③手術検体の病理診断において、病理学的総合的記載、およびがん取扱い規約に基づいた記載ができる。
- ④細胞診検体の診断法と記載法を実施できる。
- ⑤病理解剖の意義、手技、用語を理解し、剖検介助及び剖検所見を記載することができる。
- ⑥臨床経過、問題点と病理学的所見を関連付けた CPCに必要な発表スライド等を準備し、CPCで病理所見の発表ができる。
- ⑦免疫染色、遺伝子検査の技法を理解し、結果判定ができる。

3) 病理診断業務に必要な態度

- ①病理診断や CPC 等に際して患者や遺族に対する配慮ができる。
- ②CPCの討論に積極的に関与する。
- ③病理業務に際し、臨床医・コメディカルと協調できる。
- ④難解症例に対するアプローチを学ぶ。

(3) 方略 (LS)

LS1: On the job training (OJT)

- 1) ローテート開始時には、指導医・上級医と面談し、自己紹介、研修目標の設定を行う。
ローテート終了時には指導医・上級医からfeed back を受ける。
- 2) 指導医・上級医の説明の下で、病理診断業務全体の流れを把握し、病理標本作製行程の見学と理解を深める。
- 3) 指導医・上級医の下で手術検体の切出しを行い、切出し方法や肉眼所見のとり方を理解する。
- 4) 術中迅速診断について、迅速検体の取扱い、標本作製行程、診断にいたる過程を理解する。
- 5) 1 剖検症例をもとに、患者の病態生理と病理診断との連関を理解する。また、CPC 発表用のスライドを作成する。
- 6) 病理解剖に立会い、指導医・上級医の下で第 1 助手、あるいは主執刀医として剖検に携わり、解剖手技及び外表所見や各臓器の肉眼所見のとり方を学ぶ。この際、感染性廃棄物の取扱いについても学ぶ。

LS2: CPC

CPC に出席し、積極的に討論に参加する。

LS3: 臨床との連携

- ① 各科の症例検討会に参加し、積極的に討論に参加する(内科外科カンファ、呼吸器内科カンファ、婦人科病理カンファ、がんサージカルカンファを予定)。
- ②各科の臨床研究へ協力（免疫染色、遺伝子診断、写真撮影など）

(4) 評価 (EV)

- 1) 研修医は、ローテーション終了時に自身の研修達成度を確認しながら、自己評価を行う。
- 2) 指導医あるいは上級医は、全ての行動目標に対して、観察記録あるいは口頭試験などによる形成的評価を適宜行う。目標によっては必要に応じて看護師など医師以外の評価者も観察記録による形成的評価を行う。総合的な評価結果はローテーション終了時にfeed backされるとともに、オンライン臨床研修評価システムにて記載される。
- 3) 指導医は提出された病歴要約により、経験すべき症候・疾病・病態に関する理解度について形成的評価を行う。
- 4) 及びCPC発表スライドを作成し、指導医・上級医からのアドバイスを受ける。

【週間スケジュール例】

	月	火	水	木	金
午前	症例病理診断 外科材料切出 術中迅速診断 病理解剖 SBO1)2)3)	左に同じ	左に同じ	左に同じ	左に同じ
午後	上に同じ	左に同じ	左に同じ	左に同じ	左に同じ
夕刻	LS1-3	LS1-3	医局会 LS1-3	LS1-3	LS1-3

CPC：1 回/1か月

医局会：1 回/1か月

病理解剖（第1 助手として解剖補助）

技能見学（凍結標本作製、病理標本作製、特殊・免疫染色、遺伝子診断）